

### 第三章 聯隊の戦歴

#### 一、萩の亂

明治九年十月より十一月に亘り、長州萩に前原一誠の亂あり。當聯隊に征討の命令下り、少佐風間繁茂第一大隊を率ゐて之に向つた。之を當聯隊初めての出征とす。

前原一誠は吉田松陰門下の秀才であつたが、此亂は當時の失敗を悔めるに云ふ、一種の政治運動であつて、謀反など云ふものは全く意味が違つて居た。それ故前原は其の當時は賊名を蒙つたのは是非もないが、後日之を除かれて舊功に依て贈位の恩典にさへ浴するに至つたのである。

前原が十月二十八日に兵を萩に擧げるに直ちに、廣島鎮守歩兵第十一聯隊に出征を命ぜらるゝと共に、歩兵第八聯隊第一大隊に増援の命が下つた。乃ち風間少佐は十一月一日、部下二中隊を率ゐて大坂を出發し、海路を経て三日未明三田尻に上陸し、直ちに山口に到りて廣島鎮守司令長官少將三浦楢の隷下に入り、殘餘の二中隊と砲兵一小隊は翌四日山口に到着した。

風間大隊は三日夕、直ちに生雲に派遣の命を受け、少佐自ら一中隊を率ゐて先發し、更に一中隊を

後續せしめ、一中隊は萩討伐の軍に加へ、一中隊を駐めて山口の守備に當らせた。五日官軍は三道より分進して、萩に通ることに作戰計畫を定めた。其の進軍部署は左の如し。

本隊(山口の二中隊廣島の一中隊)は本道より大橋を渡り、萩の市街を衝きて松本に出て、小畑より大井に至り、阿武川を隔て、陣す。

左翼隊(第八聯隊の一中隊)は大照院に向ひ、敵を追撃して松本に向ふ。

右翼隊(二中隊)は河上より上野を過ぎて、松本に出て黒川に向ふ。

此夜月色微明にして、谷より萩の陣地を望むに、賊徒數所に集屯して官軍の散兵を射撃す。仍て砲一門を觀音橋頭に進めて放列を布き、敵の不意に乗じて之を砲撃せしに、賊徒稍々狼狽の狀あり、三浦少將拂曉に乗じ本隊を率ゐて突進し、左右兩翼隊も亦之と連絡を保ちつゝ猛進す、賊徒四散し遂に其の根據地たりし明倫館を占領した。

一方生雲口に派遣せられた風間少佐の二中隊は、四日榎谷に五日奥三谷村に達し、六日拂曉津和野、生路の兩道より分進し、津和野道を前進した者は、鷹の巢能を登らんとして、敵の抵抗に會ひ撃つて之を破り、生雲道に向へる者は宿毛越の山頂に出て、一は正面より、一は背面に迂回して前後より挟撃し、天子中村を越えて生雲に廻りたるに、賊徒潰亂し火を生雲に放ち、須佐方面に走つたが、此時萩

を破りたる官軍長驅して既に須佐に到達しあり、賊徒退路を失ひ憔悴たる大敗北を以て、此戰鬪を終つた。

此日兵卒山本倉五郎負傷す。之を聯隊に於ける死傷者の最初とす。八日生雲の諸隊山口に引揚げ、同月二十一日、全部大阪に凱旋した。

## 二、西南 戦 役

西南の亂は、明治十年二月中旬より同年九月下旬迄、薩摩、肥後日向地方に起つた内亂である。前の近衛都督陸軍大將西郷隆盛は、政府に向つて詰問の筋あり、即ち君側を清むるを稱して、自ら教育中の私學校生徒を中心とせる壯兵二萬を率ゐて東上せんとし、先づ熊本鎮臺を包圍した。隆盛は維新の功臣であつて、決して皇室に反く考へてはなかつたが、其の行動の甚だ宜しくないことは勿論である、爲に西郷は直に官位を褫奪せらるゝと共に、二月十九日鹿兒島賊徒征討の大詔を發せられ、近衛諸隊を始め各鎮臺に出征の命令が下つた。當聯隊は其の第一大隊は征討第三旅團(司令長官)に、第二大隊は同第一旅團(司令長官)に、第三大隊は同第二旅團(司令長官)に夫々編入せられ相前後して、屯營を出發した。出征當時野戰部隊の幹部は左の通りである。

聯隊長 中佐厚東武直、副官 大尉佐藤誠道 旗手 少尉樋口曹好

第一大隊長 少佐大島義昌 副官 中尉林陸夫

第一中隊長 大尉矢上義芳 小隊長 中尉加藤有行 少尉奈古正光、少尉試補餘語真三郎

第二中隊長 大尉津田元廉 小隊長 中尉成川實 少尉川内諒三 村上昌輔 少尉試補鈴木利亨

第三中隊長 大尉南川四郎 小隊長 中尉伊藤一幸 少尉吉松恭輔 少尉試補片野真雄

第四中隊長 大尉佐々木直 小隊長 中尉小野實理 少尉寺田錫類 千葉正厚 少尉本山喜淵

第二大隊長代理 大尉桑原力 副官中尉 市川祐義

第一中隊長 大尉都築正順 小隊長 少尉上野山敏光 羽山蝶 粟屋才次 少尉三松小次郎

第二中隊長 大尉井上真永 小隊長 中尉木下武夫 少尉神保新作 天野祥亮 少尉道家龜次郎

第三中隊長代理 中尉森田邦 小隊長 中尉宮崎政光 少尉矢野茂 少尉橫輝義 鹿野良哉

第四中隊長 中尉森周貞 小隊長 少尉鷲頭恒太郎 堅田謙政 小試今村武吉

第三大隊長代理 大尉波多野毅 副官 中尉山田保永

第一中隊長 大尉中谷直温 小隊長 中尉山本彈 少尉井尻誠一 少尉村上惟吉 沼澤靜雄

第二中隊長 大尉河越重幸 小隊長 少尉安田逸夫 小試佐藤富可 堀廉夫 矢野梯亮

第三中隊長 大尉内田武宗 小隊長 中尉酒井元太郎 少尉山根修三 少試山下喜一

第四中隊長代理 中尉富永直貞 小隊長 中尉福谷義貞 少尉吉松栗助 濱田謙藏 少試高木作藏

備考 當時平時編制の區別なく出征の準備も簡單であつた。

以上の如く各大隊は、其の所屬旅團を異にしたが、何れも正面軍に屬して博多に上陸し、第二、第三大隊は田原を中心として二俣、植木、吉次方面に戦ひ、第一大隊は山鹿附近に奮闘し、熊本城の重圍解けたる後は、第一大隊は三田井口に第二、第三大隊は薩摩大隅街道方面に進撃して、城山の麓に於て會合し、共に總攻撃に参加した。以下各地に於ける戦況の概要を順次に記述する。

高瀬方面の戦闘、高瀬の戦闘は、薩軍が其精銳を擧げて官軍と交へた始めて、然も此戦で大尉の勝敗を一舉に決せんとした、最も注意すべき戦闘の一で、兩軍共に健戦奮闘頗る激烈であつた。即ち二月二十四日、歩兵第十四聯隊(小倉)に依りて火蓋を切られ、同日歩兵第八聯隊第二、第三大隊は南の副に着し、第二大隊の第三、第四中隊は葛原山にて敵と衝突、直に銃火を交へたが之を驅逐して、兩中隊は二十六日高瀬橋を渡りて寺田の薩軍に迫り、山上の敵を攻撃して激戦數刻に亘り、遂に

銃剣を揮つて敵軍に突入し、猛烈なる格闘戦の後、敵軍を奪取し次で猛烈なる追撃をなして橋佐を陥れた。翌二十七日道を分つて並び進む、一擧に高瀬を屠らん、第二大隊は第十四聯隊と共に高瀬川、繁根木川の堤上に展開して、對岸の敵に對し激戦終日、日没の頃所々に自兵戦が激ぜられたる末、遂に高瀬は官軍の手に歸した、薩軍は一度高瀬を捨て、より、遂に攻勢に轉ずるの機を失ひ、空しく背進して終に後方の險所に據り、守勢を取るの止む無きに至つた。薩軍は此の一戦で敗地に塗れ、遂に中原に進出の機を逸したるは、官軍の爲には幸福であつた。

田原坂の戦、田原坂は坂路急峻にして、曲折多く路面四字形を成して、兩側に斷崖の部多く、倭樹繁茂して晝尚ほ暗きを覺ゆ、敵は此の天險を扼し、數多の壘を築き、死を以て之を守備せしものも察せられた。

三月三日、第二大隊は高瀬川を渡りて伊倉に到りたるに、兩軍木葉附近にて激戦中なるを知り、大隊は直ちに立岩の敵壘に通つて猛撃し、其の一部は敵の側面に迂回して之を攻撃したるも、敵兵克く拒ぎて一步も退かず、却て敵の一隊は吾が背後に迂回し、激戦愈々其の度を加へ、砲煙天を蔽ひ、銃砲聲地を震ふ有様であつたが、終に官軍の勝利となり、原倉村を占領した。此日中尉宮崎政光敵弾に傷く。

翌四日猛烈なる攻撃は吉次峠に向て繼續せられ、夜來の砲聲は轟々として絶えず。此時第二大隊は友軍と共に吉次本道より進撃し、激戦の後半高山を攻略し、更に進んで吉次峠の背面に出でんとして前進中、友軍が苦戦中の情況を知り、之を救はんがため半高山に展開して敵に側射を加へたるに、敵は吉次峠上の巨砲を大隊に向けて發砲應戦し、山腹に在りし敵の散兵も亦、大隊に向て劇烈なる敵射を加へたる爲に、同大隊は非常なる苦戦に陥つた。此の時敵の抜刀隊數百名、半高山に向て猛撃し來り、其の勢實に猖獗を極む、大隊は腹背に敵を受けたるも之に屈せず、將卒大に奮闘し、遂に敵將篠原國幹を斃したが、敵の攻撃力は毫も衰へず、且つ硝煙低迷して展望を妨げ、山川震動して號令徹底せず、戦團の指揮愈々困難を加ふ、此に於て止むを得ず、各隊は高瀬まで退却した。此日苦戦惡闘、拂曉より日没に及び死傷算し難く、鮮血淋漓として戰場爲に腥く、光景實に凄壯を極む、依つて、官軍の人々此の地を稱して地獄峠と呼ぶに至つた。此日上野山、矢野兩少尉戦死し、富水、市川兩中尉負傷す。

六日官軍は更に大舉して、田原本道に進撃したるも、敵は峻に據りて防戦大に勉め、勇もすれば機を見て全線攻撃に轉じて逆襲し來らんとする氣勢を示した、是に於て聯隊の一部は密に敵の背面に出でんとしたるに、忽ち側方より敵の猛烈なる射撃を受けて多大の損害を受く、正面に向へる一隊も敵の

包圍を蒙りて苦戦に陥り、森中尉(真)敵弾に斃れた。

田原、吉次の險、容易に抜き難きを見て、官軍は策戦を更へて二俣口を突破せんと、全力を此方面に注いで連日猛撃を續けたるも、此處も同じく防戦堅固にして目的を達し得ない。九日横平山に激戦行はれ、友軍悲境に陥るや、第二大隊第二中隊は、高瀬より疾驅して二俣口五郎山の敵壘に通り、猛烈なる銃火を浴せ夜に入つて彈藥悉く盡きたるも、未だ抜く能はず、神保(新)少尉之に負傷す。

敵隊は連日、其守線に就て戦鬪を續し、十一日には横平山の一壘を奪取したるも、猛烈なる逆襲に會し、支ふる能はずして再び敵手に委し、次て十四日、第三大隊の第二、第四中隊は抜刀隊と共に、二俣突入の先鋒となり午前六時、猛烈なる銃火を加へ、敵兵動搖の色あるに乗じて銃剣を揮つて突貫し、忽ち其の三壘を陥れたるも、敵は附近の地物に據つて頑強に抵抗し、我死傷續出す。此時、敵の抜刀隊は恰も怒涛の如き勢を以て突入し來り、我軍の死傷二百に垂んとし、而も後援の續くものなく、一時隊を收めて舊陣地に退却するの止むなきに至つた。尙ほ此日、第二大隊の一部は五郎山を攻撃して、敵壘を奪取した。

此日の死傷者

將校(戦死) 中尉福谷義貞 少尉濱田謙藏 安田逸夫(負傷) 少尉佐藤英致 下士卒(死傷) 百八十三名



軍議は再轉して、十五日更に田原口を突破するに決した。然るに此日、未明濃霧に乘じて、又々敵の拔刀隊三百餘名來襲し、横平山の我壘を襲ひ、我は多大の損害を蒙つて一時壘を捨つるの已むなきに至れるも、援軍漸次に到着したるに依り、終日激戦を續行し、同夜八時迄に之を恢復した。此一つの山の存否は、實に附近の險要を扼するに多大の關係が在るので、敵の奮闘は猛烈を極め、彈丸盡くるや石を擲ち、官軍の損害此一日を以て九百以上に達した。

此夜及び翌十六日の夜と二夜續けて、二俣口に於ける第三大隊の哨線の前方に茂樹幽谷を潜りて、各二百名の拔刀隊亂入し來りたるも、我軍克く防戦して之を撃退した。

十七日第二、第三大隊の一部は友軍と共に田原坂上の一敵壘に通り、激戦の後之を陥れて植木本道附近迄進出した。十八日は戰鬪愈々激しく敵軍は或は爆彈の如きものを投じ、或は得意の拔刀を閃かして逆襲する等、戰鬪は方に白熱點に達したが、十九日は一日休養して戰鬪の準備を完ふし、二十日總攻撃を行ひ、早朝夜來の豪雨を冒して、二俣口より谷を越えて潜に敵壘に通り、猛烈なる砲撃を加へ硝煙曉霧と和して、濠々咫尺を併せざるに乘じて、全線吶喊、呼喚猛進して遂に田原坂の堅壘を陥れた。此時中尉酒井元太郎、少尉試補横澤義貞負傷し、下士卒の死傷も亦少くなかつた。

山鹿方面の戰鬪 官軍が田原坂の攻撃に其の主力を配注して居る間に、薩軍の一部は山鹿附近に殺

班して来た、乃ち此の方面は二月下旬より歩兵第十四聯隊が當つて居たが、戦闘は餘り有利に發展しなかつた。聯隊長摩東中佐は第一大隊を率ゐて、三月四日山鹿附近に達し、爾後連日敵と戦闘を交へ、三月十一日旅團が全力を擧げて山鹿を攻撃するや、第一大隊は鍋田の險要地に迫つて奮戦したが、戦闘利あらず、屢々敵の猛烈なる反撃に遭ひ、苦戦の後止むを得ず、若干退却したが十五日再び鍋田の總攻撃に、大隊は本道の右方面より進み、民家を焼きて敵に迫りたるも、敵は其の堰堤に據りて防戦克く勉め、屢々刀槍を揮つて突撃し來り、一進一退互に勝敗あり、更に奮戦一番車坂右方窪地の一壘を奪取したるも死傷續出し、危機は刻一刻に通れる状態となり、止むを得ず舊守線まで退却して、該地を確實に保有した。此日吉松(徳)千葉(正)の兩少尉戦死す。

爾後激戦を繰返すこと、實に六日間、旅團は二十一日を以て總攻撃と定め、拂曉暴雨を冒して猛進し、第一大隊は道を鍋田本道に取り、砲兵火の威力揚がりて敵兵動搖するや機を逸せず、猛然銃剣を揮つて突撃し、午前十時先頭第一に山麓の敵壘に突入して之を占領し、薩軍遂に敗走するに至つた。此戦間、當旅團に屬せる者の中に、稍々勇氣に乏しき動作をなし、或は人民の物品を抄掠し、又は銃器彈藥の取扱其の當を失せる者等あり、山縣參事及び、司令長官より嚴重なる告諭を發せられたる事は、最も遺憾に堪へざる所である。

熊本城連絡 田原山鹿の占領後、聯隊の第一大隊は山鹿新町附近に、第二、第三大隊は植木木留の方面に陣し、對敵中八代に上陸したる別働旅團が敵の背後より通りて敵を撃退し、四月十六日官軍は重圍を破つて熊本城を救援した、此間聯隊は各方面に於て屢々戦鬪をなし、三月二十一日都築大尉の中隊は植木に來襲せる敵と、第三大隊第二中隊は二十三日本留日原倉方面の敵と、次て三十日三岳附近の敵と、何れも勇敢なる戦鬪を交へ、四月二日第二大隊は吉次を下り、敵の一壘を突破して木留の側面を衝き、遂に之を占領した。四月六日波多野少佐の一隊は、荻追の敵の一壘を奪ひ、第二大隊も亦奮戦大に敵の銃鋒を挫きたるも、荻追突破の目的を達するに至らずして、同大隊長桑原少佐の戦死したのは、實に遺憾であつた。

八日更に、聯隊は同方面の強襲に加はり、陰霧に乗じて敵壘を奪取す、敵は第二壘に據りて猛烈なる銃火を注ぎ、我が決死隊奮進して敵の兩翼を包みたりしも、敵火の威力熾にして聯隊の損傷頗る多く、第三大隊の第二中隊は殆んど全滅に陥り、遂に残存者數名を以て傳線に退却す。此時少尉羽山隊戦死す。九日早曉敵は滴水に猛襲し來りしも、激戦數時にして之を撃退す。此戦鬪激烈を極め、銃身熱して裝填不能となり、風々水を注ぐに至つた、一方木留荻川の攻撃も進捗せず、栗屋少尉重傷を蒙る。

三月二十一日、山鹿攻略部隊は續いて鳥栖、新町附近の敵を壓し、第一大隊も亦此の方面に活躍し、四月五日南田嶋、佐野を一蹴して鳥栖に入りたるも敵の増加隊來着に依り、鬼塚に退き該地を占領して敵を防止した。此時聯隊副官佐藤大尉重傷を受け、其の他の死傷者數十名に達す。

爾後の轉戦と賊徒平定 熊本城の連絡成るや、官軍勢に乗じて、敵の本據たる大津、木山を陥れ、敵軍は入吉、延岡の線に退きて再舉を計る形勢であつたが、官軍は七道より齊進して入吉を攻む。聯隊は上木場、北松、大關山、椎葉山を攻略し、六月一日諸隊と共に、遂に入吉を陥れた。是より敵は漸く指揮の統一を失ひ、遂に窮蹙爲す所なく、大隅薩摩の一隅に壓迫せらるゝに至つた、聯隊は六月二十九日、曾木の敵を、七月七日三田井口の敵を攻撃し、天野中尉負傷す、七月二十五日高城を占領し、爾後延岡攻撃に参加し、八月十三日都築大尉の一隊は、中の峰附近にて奮戦したる結果、敵壘を奪取すること七、偉功を奏して午前十時延岡に進入した。敵は遂に可愛嶽に退き、同十八日隆盛自ら陣頭に立ち、殘兵數百抜刀を連ねて必死の鋒先鋭く、遂に陣を衝いて第二旅團の哨線に闖入し、司令部を襲ふ等の事ありしも事遂に成らず、鹿兒島方向に敗走した、波多野少佐の大隊大に追撃に努めたりしも、遂に長蛇を逸したるは遺憾であつた。官軍は更に追撃して行々敵を撃破し、九月九日之を城山に包圍し、二十日大砲撃の後、二十四日總攻撃を行ふ。此時大隊長大島義昌突撃隊に加

り、奮戦功有り薩軍も亦、死力を竭して奮闘したるも、残兵三百に満たず。西郷降参自及し、前後之に殉ずるもの百六十餘名、残存者は悉く降伏し、茲に全く賊徒平定す。出征八ヶ月にして九月二十七日、征討の旅團編制を解かれ、十月一日大阪屯營に凱旋した。

十月二十二日、軍御恩撫として、鎮臺に侍従を差遣せられ、將校以下に酒饌料を下賜せられ、左の勅語を賜はつた。

汝等曩ニ鹿兒島暴徒征討ノ事ニ從ヒ各部トト共ニ奮戦激闘累日艱苦ヲ經遂ニ平定ノ功ヲ奏ス朕深ク其職任ヲ盡スヲ嘉ス仍テ侍従東園基愛ヲ遣シ其勞ヲ恩シ汝等以下ヘ酒饌料ヲ與フ

此戰役に於ける聯隊の死傷は最も多數を占め、前記將校死傷の外、下士卒の戦死者六百八十五名を數ふるに至つた。

### 三、日清戦役附臺灣討伐

日清戦役とは、明治二十七年より翌二十八年に亘りて、我國と支那との間に起つた戰爭で、其の遠因としては、京城事變や防毅令事件や、金玉均暗殺事件等があるが、其の近因は二十七年四月朝鮮に起つた東學黨の亂である。同黨は武力を以て國政の改革を圖らんとし、朝鮮の北部を風靡して五月に

は、將に京城に迫らんとした。當時朝鮮に在つた支那公使袁世凱は、此の機を利用して朝鮮を支那の屬國たらしめんとし、朝鮮政府を脅威して、支那に對して出兵を請はしめ、遂に天津條約を無視して我國の同意を得ずに朝鮮へ出兵するに至つた。仍て我國は韓國の獨立を擁護し、併せて同國に於ける帝國の利益を確保する爲、八月一日支那に對して宣戰を布告し、各師團に動員令が下り、大元帥陛下には九月十三日東京を出發せられ、大本營を廣島に進めさせられた。此の戰役に於て第一番に出征したのは、少將大島義昌の指揮する混成旅團で、朝鮮の仁川に上陸して先づ京城を占領した。我海軍は、七月二十五日に豊島沖にて敵の海軍に一打撃を與へ、陸軍は次で成歡、牙山にて敵を撃破した、宣戰の詔勅は其後に渙發されたのである。

九月十六日、野津中將の率ゐる第五師團は平壤を攻略し、翌十七日伊東海軍中將の率ゐる我艦隊は、黃海に於て敵の海將丁汝昌の率ゐる優勢なる艦隊と戰つて稱世の大勝を博した。

十月十七日山縣大將の率ゐる第一軍の主力は、鴨綠江を渡りて九連城を衝き一撃に之を抜いた、敵は奉天、海城、大孤山の三方面に分れて敗走した。次で大山大將の率ゐる第二軍は、遼東半島の花園口に上陸し、其の第一師團(中將)は、十一月三日金州城を攻略し、同十一日第二軍全力を以て旅順要塞の總攻撃を行ひ、歐米人の少くも一ヶ月を要すべしと豫想したる堅城を、勇敢無比の我が陸海軍

は僅かに一日の間に、其の全砲臺を奪取した。

二四

第一軍方面は連山關、輔巖、柘木城等に於て、連戰連捷破竹の勢を以て敵を撃破し、氷雪や諸般の缺乏等と戦ひつゝ、前進し、桂中將の率ゐる第三師團は海城を占領し、全軍士氣大に振ふ。

一月十九日第二軍司令官は、第二、第六兩師團を以て大連を發し、海を越えて山東半島の一角に轉戦す。即ち榮城灣に上陸し、一呵して摩天嶺の敵を驅逐し、繼ひて威海衛の諸砲臺を奪ひ同地を占領す。二月我海軍は、威海衛に於ける敵海軍の根據地を奪ひ、水師提督丁汝昌殘艦數隻を我に獻じ、同地に於て自殺す。

二十八年一月十日第一師團の旅團長たりし、乃木少將は遼平を屠り、同師團は太平山の敵を撃破し、茲に第一、第二軍の連絡を通ずるに至り、三月四日第三、第五師團の協同を以て、牛莊營口を占領した。

是より第二期作戦に入り諸軍を營口に集中し、進んで直隸平野に一大決戦を試みたる後、長驅して北京を衝き、清國をして城下の盟を爲さしめんとする作戦計畫をたて、近衛及第四師團を以て北京突撃の先鋒たらしむべく、兩師團は相携へて宇品を出帆した。又戦局の擴大に連れて、陸軍大將小松宮彰仁親王を以て、征清大總督に任ぜられ、樺山、川上兩大將以下諸員と共に、十月十三日宇品出帆戦

地に向つた。然し其後は特に記すべき戦闘もなく、三月中旬休戦さるるに至つた。以上は日清戦争経過の概要である。

是より先き、歩兵第八聯隊は、十一月二十六日動員下令となりたるま、久しく待命し、捷報頻りに到る毎に徒らに骨肉の嘆を嘔ちつ、あつたが、翌年三月二十四日第二軍の戦闘序列に入り、同月二十九日屯營出發、同三十日廣島に集合を終つた。然るに聯隊が出征の命令を受けたる頃より、媾和の軟風は頻々として吹き初め、同日を以て遂に媾和談判開始のため、休戦の詔勅を發せらるゝに及んだ。然し豫定の行動に變化なく、四月九日午前將校同相當官一同は大木營にて拜謁を仰付けられ、午後廣島縣會議事堂にて立食の宴を賜ひ、十一日宇品を出發して征途に上り、十四日大連灣に到着した。然るに不幸にも此の航海中、虎列刺患者を發生し、病勢猖獗蔓延盛んにして多数の病死者を出したるは、實に哀悼の限であつた。十七日及び十八日の兩日柳樹屯に上陸し、隔離のため森營を行つたが、死者日に多きを加へ、柳岡一櫻の煙ミ化し去るもの終に、百を以て算するに至つた。

斯る間に媾和談判は、下の關に於て我全權大使伊藤博文、陸奥宗光と、支那の李鴻章との間に接衝を重ね、順調に進捗して四月十七日調印を終り、同二十一日平和克復の詔勅を發せられた。當聯隊は遂に敵と一戦を交ふる事なくして時局は解決し、徒らに大尉秋本嘉之及び下士卒百七十七名を病魔の



爲に、奪ひ去られたことは遺憾千萬であつた。

二六

茲に三國干渉なるもの突如として起り、我同胞の血を以て購ひ得たる遼東半島は、全部之を清國に還付するの餘儀なきに至り、五月十日には遼東半島還付の詔勅が煥發せられ、我帝國の臣民は血を湧かせ熱涙を飲んだ。次で十三日陸海軍人に左の勅諭が下された。

勅諭

朕カ親愛ナル帝國陸海軍人ニ告ク

朕兵馬ノ權ヲ統ヘ明治十五年陸海軍ノ制略ホ立ツニ於テ汝等ニ軍人ノ精神五ヶ條ヲ訓諭シ忠節禮儀武勇信義實素貫クニ一誠ヲ以テスヘキコトヲ告ケタリ朕カ汝等ニ訓諭スルノ殷切ナリシモノ洵ニ汝等ヲ以テ朕カ股肱ト頼メハナリ

爾來治平ナ有餘年客歲清國ト奪ヲ啓クヤ汝等ハ朕カ一號令ノ下ニ起ツテ隆暑ニ隆へ祁寒ヲ冒シ内ハ籌畫警防ヲ努メ外ハ進攻出戰ニ勞シ陸ニ海ニ振古未タ有ラサルノ偉勳ヲ奏シ能ク交戦ノ目的ヲ達シテ帝國ノ光榮ヲ四表ニ發揚セシメタリ朕ハ陸海軍ノ進歩茲ニ至リタルヲ欣ヒ汝等カ深ク五ヶ條ヲ服膺シテ敢テ失墜セス命ヲ重シ生ヲ輕シ以テ能ク朕カ股肱タルノ職ヲ盡シタルヲ嘉ス獨リ鋒鏑ニ斃レ疾病ニ死シ然ラサルモ病瘵トナリタルモノニ至リテハ朕深ク其事ヲ烈トシ其人ヲ悲マサ

ルヲ得ス

朕今清國ト和ヲ媾シ汝等ト俱ニ治平ノ慶ニ賴ラントス願フニ軍隊ノ名譽ハ帝國ノ光榮ト共ニ汝等ノ責務ヲ重カラシム

朕ハ我武維レ揚リテ汝等ト其譽ヲ併ニスルヲ樂ムト雖モ邦家ノ前程ハ尙遠達ナリ汝等其レ能ク朕ノ訓諭を遵奉シ留リテ隊伍ニ在ル者ト散シテ郷閭ニ歸ル者トニ論ナク五事ヲ服膺シテ軍人ノ本分ヲ格守シ一誠以テ他日ノ報効ヲ期セヨ

明治二十八年五月十三日

五月十七日第二軍戰團序列を解かれ、午後占領地總督の指揮に屬し、六月七日海城に着して同地附近の守備に任せしも、八月四日更に鳳凰城の守備を命ぜられ、移動の行軍中降雨の爲、泥濘膝を没し或は河川の氾濫に會する等、且に艱苦を嘗めて九月四日鳳凰城に入り、同地に停止して服務しつゝ、あつたが、十一月二十日撤退の命令に接し、金州を經大連灣を出帆して、十二月二十四日屯營に凱旋し、翌二十五日忠死者の臨時招魂祭を執行した。

#### 臺灣土匪の討伐

聯隊が遼東半島より歸來した後、日を経ざるに臺灣の北部に賊徒蜂起して其勢猖獗を極め、之が

討伐の命は二十九年一月五日當聯隊に下つた。日清戦争に只の一戦も交へなかつた、め、遺憾遣る方無かりし聯隊の將卒は、此命に接して手の舞ひ足の躍るを知らず、非常に勇み喜んで直に出動準備を整へ、大久保混成旅團に隷屬して、一月六日前田聯隊長は第二大隊を率ゐ、先發隊として屯營出發、八日宇品を出帆し、同十三日蘇澳に上陸し、第三大隊は旅團司令部と共に七日出發、同十四日同一地に上陸した。混成旅團の編制左の如し。

二八

長隨軍少將大久保春野

歩兵第八聯隊(古兵のみにて編成せる二個大隊)

同 第九聯隊(右に同じ)

砲兵第四聯隊の一中隊

工兵第四大隊の一中隊

騎兵若干

當聯隊の幹部左の如し

聯隊長 前田隆禮 副官大尉 南部頼精

第二大隊長 少佐中村無一 第三大隊長 少佐梶原透

蘇澳は日清戦役の結果、我有に歸したる新領土である。前巡撫總督の劉永福なるもの清國政府の命を奉せず、同島の土人を煽動して皇軍に抗したるを以て、近衛師團を遣し之を討伐し、劉は厦門に逸れ、一先づ鎮定したるも所々尙ほ不穩の情があつたので、第二師團を新竹以南に配備し、以北には後備歩兵約三十中隊を駐屯せしめて、嚴重に警備させたが、果せる歳二十八年の末に、劉の一派は又もや非望を逞しふし、盛に土匪を煽動し、或は武器を供給し、又は兵士を送りて之を指導した。就中項双溪を中心とするもの其勢最も強く、洩底、蘇澳の我等守備隊を撃破し、三貂嶺の險を扼して基隆方面よりする我軍の進撃を防止し、宜蘭に集中せる我軍の一部を包圍した。又蘇北附近に起つた匪軍は瑞芳、錫口、海山口を占領し、尋で蘇北を圍み、鐵道電信を破壊して基隆との連絡を遮斷した。又他の一隊は金包里に集合して、其兵數約一萬と稱し、我守備隊は其其の任地を堅固に守備しあるのみで、賊徒を掃蕩するの餘力がないので、彼等は恣のまま、に跋扈騷擾を逞くしつ、あつたのである。一月十三日蘇澳に上陸したる聯隊の先發隊は、同日午後零時半運動を起し、南興庄附近に於て敵の射撃を受ひたるも、前衛たりし第五中隊は直に之を撃攘し、尋で冬瓜山を占領す。翌十四日宜蘭に入り、同地守備隊たりし後備第五大隊と協力して、全市に嚴重なる哨線を張り、憲兵及び巡查をして戸毎に隨檢せしめ、暴動に参加したる者、三十九名を發見之を捕へて銃殺した。

第三大隊は相原少佐指揮の下に二道より分進し、檜麿山を迂回して十五日宜爾に到着したが、此の途中同大隊の右從隊(第十一中隊)は成興附近にて敗殘兵の民家に潜入せる者を驅逐するため、一民家を焼きたるに轟然火藥の爆發する音を聞く、茲に於て、附近一帶の民家を嚴重に搜索し、遂に賊徒九十三名を捕へて之を銃殺した。

三〇

賊徒一千數百尙ほ林尾庄、柴園庄附近に集結し居るとの情報を得て、旅團は十七日運動を起し、大坂附近の敵を撃破して篇破山の堡壘を屈つたが、賊は柴園庄、三圓、林尾庄の各村落に堅固なる防禦工事を施して我に抗戦した、依て先づ林尾庄の敵に向て猛烈なる砲撃を加へたるに、賊は悲鳴を擧げて山猪窟方面に潰走した。是より先き第二大隊は別路より迂回して、山猪窟に出て敵の退路を扼したので、茲に激烈なる混戦亂闘を演出し、敵兵數百を射殺した。此時忽ち一人の賊は不意に現はれ、竹槍を揮つて中村少佐に肉薄し、あはやと思ふ時少佐の側に在りし山根軍曹刀を揮つて、一撃の下に賊を斬殺し、大隊長の急を救つた。衆皆其沈著勇武に感嘆せざる者はなかつた。

大坂推溪を占領し、最も頑強なりし柴園庄も歩砲工兵の協同宜しきを得、全部落、火災に包まれ、田没頂に至りて我手に歸し、賊は三圓及び頭園の方向に潰走し、伏屍三百を遺し傷者約五百を數へたるものの如く、我は敵の大砲二門と多數の小銃等を鹵獲した。此間に於ける聯隊の死傷は、軍

曹細原房吉の戦死、以下十四名に過ぎなかつた。同夜敵は我哨線に向て、逆襲し來ること前後八回に及んだが悉く撃退した。

翌十八日福原少佐は第三大隊(二中)を率ゐ、島浦附近に位置して山路を扼し、頭圍方向の敵に對して警戒し、十九日前田大佐は聯隊の主力を以て頭圍の攻撃に向ふや、打馬畑の竹林中より不意に敵の猛射を受けたが、之を突破して頭圍の敵に對し、其の側面より砲撃を加へ、賊徒百五十を斃して同地を占領し、爾後項双溪の支隊と連絡して殘敵の掃蕩に努めた。越えて二十一日夜、萩野中尉(謀)は前哨司令として哨線を巡視中、忽然數名の敵に圍まれ、軍刀を揮つて奮闘し、遂に敵三名を斬殺したるも、衆寡敵せずして壯烈なる戦死を遂げた。

二十六日臺北との連絡を復し、附近又一の土匪影をも認めず、平定の功を奏して聯隊は、七月一日臺北を出發し、同日基隆を出帆、同六日大阪に凱旋した。

#### 四、日露戦役

日清戦役の結果一度我軍の領有に歸した遼東半島は、露、獨、佛三國の勸告に依りて、清國に還付した。然るに三十年の秋、清國山東省にて暴民が獨逸人を殺害したため、獨逸は膠州灣を占領した、

露國は此の機會に乗じて、旅順を事實的に占領し、尙ほ三十三年の北清事變に乗じて滿洲を占領し、遂次朝鮮に迄手を伸して極略的の行動を敢てし、直接我國に脅威を感ぜしめるに至つた。是に於て帝國政府は黙止する能はず、露國に向つて至誠を披瀝し、東洋の平和を永遠に維持せんがため、協商をなしたるも露國は毫も誠意なく、徒らに交渉の時日を延ばし、其間に陸海の軍備を充實して、我を威壓せんとする行動に出たから、我帝國々民の公憤は絶頂に達し、遂に翌三十七年二月八日我海軍は旅順の敵艦隊を夜襲し、翌九日仁川港外に於て敵艦二隻を撃沈し、茲に戦端は開かれ、二月十日宣戰の詔勅を公布せられた。

三國干渉以來實に臥薪嘗膽の思をなし、陰忍十年竊かに機會の到来を待ちに待つた五千萬の我同胞は、踴躍して奮ひ起つたのである。越へて同十二年陸海軍大臣、並に各師團長を宮中に召されて特に親しく左の優詔を下し給ふた。

勅 語

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ朕カ衷心ノ欣幸トスル所ナルカ故ニ清韓ノ兩國ニ關スル時局ノ問題ニ付朕カ政府ヲシテ昨年來露國ニ交渉セシメタリ然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキコトヲ確認セシムルノ止ムヲ得サルニ達シタリ蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接

ノ關係ヲ有ス茲ニ於テ朕ハ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷テ我獨立自衛ノ爲ニ自由ノ行動ヲ執  
ラシムルコトニ決定セリ

朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス  
第四師團長は謹んで左の如く奉答した。

臣又次謹テ奏ス陛下優渥ナル勅語ヲ賜フ臣等感激ノ至ニ堪ヘス誓テ聖旨ヲ奉體シ皇威ヲ發揚セム  
コトヲ期ス 臣又次部下ヲ代表シ誠恐誠惶謹ンデ奉答ス

明治三十七年二月十二日

第四師團長 陸軍中將男爵 小川 又次

同十九日小川師團長は大坂に歸り、管下各隊に左の如く訓示した。

今や大詔を奉體し不日將に征露の途に上らんとす。實に是れ千載一遇の盛舉にして、我々軍人の  
期待する所なり。決死勇奮、敵軍を撃破し、以て大詔に奉答するを期す。人世豈愉快の極ミ云は  
ざるべけんや。夫れ部下の將卒、干戈を執り、征戰に従ふ者と、内に在て事を執るものとは論な  
く、各々其本分を盡すは、深く信する所なりと雖も、尙茲に一言を示す。將卒夫れ努力せよ。

日露の風雲急を告ぐるや、聯隊は由良要塞の警備を命ぜられ、第一大隊長藤岡少佐の指揮する五中  
隊は、二月六日出發任務に就き尙同日先遣復讐衛隊として、小谷中尉以下百六十六名韓國に向て出



發した。以來約三旬陸海の戰捷を傳へ、又近衛、第二、第十二師團を以て第一軍を編成して、既に出征の途に上りたるに拘らず、第四師團は未だ何等の命令に接せず、將率腕を扼して動員令の來るを待ち受けたが、更に是れ無き爲或は疑惑を生じ、奇異の風説を傳へ揣摩偵測し、吾師團は征戰に用ふるに至らぬであらう等の風説起り、將率激昂し、在郷將校中憤然箝を他師團に移す者陸續として生ずるに至つた。然るに三月六日突如として動員令は下り、管内俄に歡聲湧き、相擁して鼓舞する等、光輝頗る壯絶を極めた。

三四

出征當時に於ける野戰部隊の幹部左の如し。

聯隊長中佐能美成一 副官大尉水郡富三郎 旗手少尉羽藤辰一

第一大隊長少佐藤岡鉄次郎 副官中尉瀧本信夫

第一中隊長大尉尾田源太郎 小隊長小尉奥野光雄 同多川陸之允 上級特務曹長音代音吉

第二中隊長大尉長谷川直敏 小隊長中尉柏村鏐彦 少尉小賀環 同豊田文三郎

第三中隊長大尉坂部義勇 小隊長少尉三宅播生 同廣谷儀一郎 同乾隆吉

第四中隊長大尉岩永徳太郎 小隊長少尉貫一也 少尉古川泰夫 少尉宮津隆哉

第二大隊長少佐勝野直太郎 副官中尉村松新一郎

第五中隊長中尉河田惠長治 小隊長中尉中澤金太郎

第六中隊長大尉安井勝弘 小隊長少尉大塚元固 同松浦貞造 同芝川又三郎

第七中隊長大尉高田宗城 小隊長中尉堀田則三 同東榮太郎 同田中館雄

第八中隊長大尉堤加雄 小隊長中尉吉成欵 少尉廣野孝一 同森七郎

第三大隊長少佐下江孝 副官中尉那谷清太郎

第九中隊長中尉草刈宗太郎 小隊長少尉京極秀三 同佐藤岩之助 同谷澤隆次郎

第十中隊長大尉吉弘藤次郎 小隊長少尉鋒谷好太郎 同青柳新次郎 同林榮助

第十一中隊長中尉田門謙一 小隊長少尉藤田謙二 同日置敏直 同岸峻

第十二中隊長大尉牧田六三郎 小隊長少尉東萬太郎 同中村辨三 同菅多太一

三月十五日動員完結し、師團は第二軍に編入せらる、軍司令官大將男爵奥保繁より右の訓示を授受した。

訓示

本日戰鬥序列を命ぜられ、不背保繁恭しく、第二軍司令官の重任を荷ひ、將に諸君と共に遠征の途に上らんとす。因て一言して諸君に告ぐ。

夫軍人は國家の干城なり。有事の口、身命を擲ちて奉公すべきは、何ぞ多言を要せん。殊に本役

は、我帝國千古未有の大戦にして、其勝敗は實に國家の安危に關す。皇殉國の至誠を盡して、奮勉努力せざるべけんや。況や 天皇陛下は、本役の成功に對し、特に優詔を下され、吾人に信頼し給へるに於てをや。

三六

回顧すれば、帝國の露國と關係を結びたるは遠く四十年前の樺太事件に始まり、日清戰役を経て、此關係更に増大し、早晚本役の起るべきを豫期し、國防に軍備に大に力を用ひたりしが、今や果して之を砲火の間に解決するの、已むを得ざるに至れり。而して本役は、彼の日清戰役、及び北清事變の如く、連戦連勝し得るものと速了すべきにあらず。期する所は専ら終局の勝利に在り。故に保業は諸君と共に、誓つて此趣旨を體し、假令戰爭幾年に互るとも、終始一貫、堅忍持重、協心戮力、共同一致、勝ちて待まず、敗れて撓まず、帝國特有の忠勇を鼓勵し、常に敵兵を排撃壓倒するの決心を以て、軍の成功を圖り、上は陛下の宸襟を安じ奉り、下は國民の與望に答へ、益々皇威國光を宣揚せんとす。諸君幸に保業の微衷を諒せられよ。

明治三十七年三月十五日

第二軍司令官 陸軍大將 奥 保 鞏

四月十五日管下諸隊大阪に集合し、同日城東練兵場に於て、師團長軍容を閲し、其講評は左の如くであつた。

戦備完全にして遺す所なく將卒の意氣内に充ちて外に溢るゝを認め、予は豫め我師團の必勝を保し祝福の情、禁ずる能はず。

四月二十三日大阪築港より上船し、天地も震動する様な歡聲に送られて征途に上つた。此日同港を解纜した御用船は凡て十餘隻、指して行く方は船長も知らず、況や船中の將卒をや、唯だ先頭に立てる警備艦の信號のまに／＼舵を操り、夜は燈火を消して進航し、四月二十七日韓國大同鎮南浦に投錨し、假泊すること旬餘日、此の間に黒木大將の第一軍は、既に第一歩を滿州の野に印し、旅順口の閉塞は決行第三回に及んだ、聯隊の船は五月六日假泊地を出發して、遼東半島の東北角なる猴兎石の沖に投錨し、十日孫家咀子と云ふ、港でも何でもない一小部落に上陸した。此日天候稍や不穩で浪高く、二三の短艇は忽ち波壞されたるも、萬難を排して上陸を決行したが、最も困難したのは、此附近一帯は遠淺で岸より二三千米の所迄しか舢舨が進めないで、已むを得ず、皆艦を没する海中を徒渉して上陸し、此夜は黄家屯に村落露營を行つた、敵地上陸第一夜の夢やをも如何に！

南山の激戦五月中旬黒木大將の第一軍は、既に九連城を屠り、敵軍の南下は遠く大石橋附近に在りて逡巡し、金州附近にある敵は歩兵一旅團と砲兵三中隊若干の騎兵で、其の主力は南山を守備し、一部を十三里寨、金州城、劉家店附近に配置し、少將フオークが之を指揮して居た。第二軍の任務は、

先づ旅團と滿洲方面の兩敵の連絡を遮断するにあつたので、軍は大沙河、普蘭店の線を占領するに決し、五月十五日より攻撃準備に着手し、各師團は戦闘隊形を以て前進し、聯隊は十七日夜、十三里寨子に達して前方を警戒しつゝ、戦機を熟すのを待った。

南山は半島の突角に近き狹隘なる地頭部で、海と海との間は僅かに一里内外で、此中間を占めた一高阜である。敵は此の天峻の地に、十數の砲臺堡壘を築く等、十分なる工事を施して、堅固に之を守備して居つた、故に、此山にして依然敵の手中に在らんか、我軍の陸上より旅團要塞を攻撃することは、絶対に不可能であつたのである。

五月十七日聯隊(第三大)は師團の前衛、第三大隊は、砲兵第一旅團の支援として前進し、金州北方及同東北方一帯を占領した。總攻撃は二十六日早曉と決し、第四師團は軍右翼となり海岸に沿ひて運動し、聯隊(第三大)は歩兵第三十七聯隊と共に北河々口より金州城西南角の線に至り、南山西北面より南山の敵の左翼を包圍する如く行動を執り、第三大隊は崔家屯附近に在りて旅團の豫備隊となつた。歩兵第十九旅團は金州城の敵を、夜襲したが功を奏せず、同城は二十五日朝第一師團が占領した。

聯隊は二十六日午前三時三十分、第一大隊(第四中)第二大隊(第六中)を第一線とし、第四、第六中

隊を準備隊として金州北河々日より金州城の南に互り展開したが、夜來の疾風暴雨は未だ霽れず咫尺  
暗黒、且つ道路險惡の爲、屬隊の連絡を失はんとし、闇を劈く銃聲は四圍に響き、閃く電光は敵の火  
箭に和して光景轉た凄壯を極めた、四時三十分頃目的地附近に達したが、金州城の陥落前に、南山に  
向つて奮進するの不利を悟り、龍王廟東方高地の舊陣地に退却して隊伍を整頓して次の進撃時機を待  
つた。午前六時雲霧漸く霽れると共に、砲聲は猛然として全線に轟き渡つた、此時我砲艦の一隊も敵  
軍を砲撃して、陸兵に協力した、是に於て聯隊は師團の右翼に在りて、南方の堡壘に向て猛烈なる前  
進を開始したが、此地域は海岸なるため、平坦開闊眞に據るべき一點の地物もなく、全然敵の銃砲  
火に曝露しあり、爲に死傷續出するも屈せず、第四中隊は膝を没する海中を徒渉して前進を繼續し  
た。躍進又躍進、敵に近接するに従ひ敵火の威力は愈々甚しく、我は停止毎に各自、小掩體を築き  
て呼吸の恢復を計りつ、漸次敵軍に近道を謀つたが、死傷は漸次多きを加へ。殊に蘇家屯東北に在  
りし敵砲兵の猛射は、少からず我が銳氣を阻めた。此の砲兵は間もなく我砲兵の制壓に逢つて沈黙し  
たが、更に大毛家壘と太房身との中間に於て砲火を開いた、約二十門の豪砲が其威力を逞ふし、此  
の猛射に依り損傷多大に及んだ。尙ほ敵の歩兵は南山北斜面に銃眼及び、掩蓋を有する數線の散兵隊  
を、所謂八卷狀に築きて之に據り、且つ其前方五六十米には、一帯に鐵條網鹿柴等の副防禦を設

け、自ら姿を現さず、殆んど安全の位置に身を置いて居るので、其の射撃は命中頗る良好、我は全く之に反する状態にて、苦戦の状況に絶し、一躍進毎に一小隊内に十数名の死傷を生じ、死屍算を亂して横るの悲境に陥り、爾後の前進極めて困難、遂に午後一時に至つた、午後一時過ぎより我砲兵の射撃漸く奏功著しくなり、此の機逸すべからずと見て取りたる各聯隊は、相呼應して前進を開始した。聯隊は損害を顧みず、海岸方面より進み敵前二百米に肉薄した。此時不幸なる哉、我砲兵歩兵共に彈藥缺乏を來し、一時射撃を中止し、其の位置に停止するの餘儀なきに至つたが、午後四時再び前進を起し、工兵隊は彈雨を浴びて、鐵條網等の破壊に従ひ、砲兵又敵の散兵線を猛射して力を協せ聯隊は全滅を期して全線前進を企圖した。敵の射撃は猛烈其の極に達し、殊に大毛家附近よりする敵の砲火は、其威力最も強烈にて、聯隊は大隊長以下、多數の死傷を生じたも、些も屈せず。此時將士の眉宇には正に決死の色が漲つて居たが、とうく全員は渾身の勇を奮つて、屍に蹠き血に滑りつ、敵軍前百乃至、百五十米に逼迫した。さしも頑強なりし敵も、我軍の必死猛烈なる攻撃に壓せられて、稍々動搖を始め、退却の色が見えた、機乗すべしと思つた一刹那、勇壯なる突撃喇叭は全線に響き渡つた。此時一早く長尾田大尉の第一中隊は、毅然南山砲臺に突進し、先頭第一に司令塔上に、日章旗を懸して萬歳を絶叫した、時、正に七時三十分、四邊糺糊として夜氣既に迫る。次で長

四〇

堤大尉の第八中隊も、北方の砲臺を奪ひ、我軍の全線敵陣に突入す、敵は砲車を捨て置きたるまゝ、地際内又は後方に通じてある壕内を退却し、敵方に敗走した。

此日未明より奮戦を続けること、十有六時間の長きに亘り、藤岡、高田の二大隊長を失ひ、第七中隊長負傷したるも、終始奮闘を続け、遂に先頭第一に南山の保壘に突進したる功績は、永遠に消えやらぬ當聯隊の名譽であつて、明治十年西南戦役から少しく不詳であつたのも、つまり世上の誤解であつて、聯隊の勇敢さは茲に立派に立證され、不名譽を完全に一掃し得たのは、洵に國軍の爲大慶とすべきである。

南山戦團に於ける、聯隊の死傷者左の如し。

戦死 少佐藤岡鉄次郎 同高田宗城 中尉芝川又三郎 少尉廣谷儀一郎 特務曹長小坂田登 下

士卒百十六名

負傷 大尉水郡富三郎 同長谷川直敏 同岩永徳太郎 同安井勝弘 同堤加雄 同河田惠長治

日田門謙一 少尉奥野光雄 宮津隆成 古川泰夫 大塚元固 浅野勇次郎 森野孝一 藤

田謙二 岸峻 特務曹長菅代音吉 吉安暢 下士卒四百六十名

五月二十九日此の大勝に對し 大元帥陛下より第二軍に對し左の勅語を賜つた。



第二軍ハ海軍支隊ト協力シ敵ノ死守シタル金州城及ヒ其南方要害ノ地ヲ力攻シ遂ニ之ヲ陥レ以テ旅順口ノ咽喉ヲ扼シ且ツ我野戰軍將來行動ノ地歩ヲ堅固ナラシム

朕深ク爾等ノ忠勇ヲ嘉シ尙益々奮勵シテ終局ノ勝利ヲ收メムコトヲ望ム

爾後の北進 南山の戦後、聯隊は金州附近に在つて休養中、第一師團は第三軍に編入換になり、第五師團が代りて第二軍の戦順序列に入つた。

時に露軍は西北利第一軍團に、別の二個師團を配して、シタケリベルグ兵團と稱し、之を南下して旅順を救護せしめんとした。此兵團は日夜急行して將に得利寺附近に迫つた、六月十二日軍は之を逸撃する目的を以て北進の途に上り、聯隊は軍の左翼に連つて前進し、十四日復州を占領し、翌十五日得利寺にて敵と衝突し、之を撃退したが、聯隊の進路方面には敵の隻影をも認めず。越へて二十一日、勝部少佐の第二大隊は、我騎兵旅團と協力して熊岳城の敵を撃破し、第七中隊を同地の守備に残して、聯隊主力は二十二日更に北進し、七月九日蓋平の攻撃に参加したが、戦闘は激しからず、下士以下二十名の死傷を生じたに過ぎなかつた。尙ほ七月二十三日より同二十六日に亘り、大石橋附近の戦闘があり、聯隊も之れに参加したが、是れ亦さしたる事なくして終を告げた。又八月一日より同三

日に亘り、海城攻撃に参加したが、聯隊は常に軍の左側で側面掩護の必要等よりして、少しく後方に位置したる爲、自然敵の主力と衝突する機会無くして終り、聯隊の將卒は大に脾胃を嘆した事である。

遼陽の戦陣 遼陽の南滿洲に於ける四通八達の要衝であることは、茲に記述する迄もない。然れば敵帥クロボトキンが、極東の總司令官に任ぜられて、滿洲に到着するや、彼は第一期作戦の主陣地として遼陽を選定し、日本軍を此處に遠撃せんと期したのである。八月下旬此の附近に集中せる敵の兵力は、七個軍團で兵數二十二萬五千と砲六百門を算し、遙に我に優つて居た。然し乍ら我も亦精銳無比を誇る日本軍で、此時第一軍は既に摩天嶺を屠りて遼河平原に進出し、大孤山に上陸した。第四軍も岫巖柞木城を一蹴し、第二軍も亦大石橋、海城を陥れて意氣軒昂、今や大山總司令官の指揮下に、三軍呼應して遼陽に迫り、廣范數十里の大平原に驚天動地の大活躍を演じて、其の雌雄を決せんとするのである。

機は愈々熟して八月二十六日、遼陽總攻撃の幕は切つて落され、曉霧四周を鎮す午前二時、聯隊は宿營地たる大莫七屯を出發し、師團の右翼に連りて前進し、小敵を驅逐し之を壓迫しつ、漸次敵の本陣地に近逼す、此間數日數夜に亘り、或は暗夜に途を失ひ、或は泥濘に脚を奪はる、など、各種の苦

櫛を管めて三十一日水興嶽附近に達した、折柄各方面共戦團は方に配にて、敵は漸次遼陽附近に壓迫せられたるため、愈々死力を盡して奮戦し、爲に師團の左翼及騎兵隊の如き非常なる苦戦に陥り。敵は往々進んで攻勢に轉ぜんとする氣勢を示した、我は之れが對抗策を講ずる最中に、師團長小川中將敵の弾片に傷き、當旅團長西島少將代つて師團の指揮を採るに至つた。此際左の砲隊降り志氣に大に振ふ。

滿洲軍ハ克ク諸軍ヲ糾合シ各路齊シク防備堅固ナル敵ヲ撃退シ終ニ之ヲ遼陽ニ壓セリ朕其勇武ヲ嘉ス以來日夜劇戦ヲ繼續スルヲ聞キ深ク其勞苦ヲ懷ヒ轉々軫念ニ堪ヘス  
朕ハ爾將卒ノ勇武ニ信賴ス爾將卒其レ益々奮勵セヨ

南山の戦後、聯隊の進路常に敵影を見ず、將士悶々の情ありてあつたが、九月一日師團の右翼第一線となり、太子河鐵橋附近に向つて突進すべき命を受けた。勝敗の数は定まつたが敵は未だ遼陽以北には退却しない、遼陽停車場及前石橋附近には、まだ一師團に餘る大部隊あり、處々に砲聲、散兵壕を設けて頻りに我軍を苦めつ、あつた、聯隊は敵の彈雨を冒して蔡家庄子、西八里庄、尤家庄子の諸部落を占領したが、敵は未だ退却の色だに見せず、九月二日右翼第六師團方面は却て敵の壓迫を受け、苦戦の狀に陥り居るので、聯隊長能美中佐は斷然敵を夜襲するに決心し、第一大隊及び第六、第

七中隊を以て、午前三時蔡家庄を發し、西關附近の敵に向て前進した。敵前約五十米に達したる時、敵は機關砲を以て我を猛射し、且つ我を包圍せんとして來襲し、奮戦中第二中隊は殆んど敵の包圍を受け、中隊長以下將校准士官悉く死傷し、下士以下百六十名を失つたが、頑として其位置を保ち、幸うじて敵を撃退した、然し敵は午前七時再び攻撃し來り、聯隊は死傷續出したるも、各中隊力戦死守一步も動かさず、かゝる間に我砲撃の効果現はれ、午前八時頃、第二大隊は王家雙樹子北端を占領し續いて第四中隊及第三大隊も同地に來て敵を壓迫した、夜に入りて騎兵漸次退却の徴候が見えた。

九月三日早朝、追撃の準備をなし、午後一時半砲兵が前面の機關銃隊に一撃を與へたるに乗じて前進、七時三十分既に敵前四五百米に迫りたるも前面の敵は尙ほ頑強なる抵抗をなし、聯隊はこゝに多數の犠牲を出すに至つた、而も午後八時に至るも未だ突撃の機を得なかつたが、夜の更くるにつれて、敵の抵抗漸く減退し、遂次退却を始め、翌午前二時聯隊は遼陽停車場に達し、之を占領した。此時遼陽四周を窺いて敵の所在さへ不明で追撃は意の如く出来なかつた。

九月六日滿洲軍に左の優詔を下し賜はつた、

遼陽ハ敵ノ兵略要地トナシ以ニ防備ヲ嚴シ軍資ヲ集積シ全力ヲ竭シ死守セシ所今滿洲軍萬死ヲ

冒シ百難ヲ排シ奮戦數日ヲ連テ遂ニ之ヲ拔ク

朕深ク其功烈ノ偉大ナルヲ嘉ス

惟フニ其畫策慎重ニシテ果斷其運動整齊ニシテ敏活而シテ爾將卒之ヲ貫クニ忠誠勇武ヲ以テスルニ非サレハ馬ンゾ能ク此ニ至ルヲ得ム抑々作戦ノ前途ハ尙ホ遠遠ナリ爾將卒夫レ自愛堅忍更ニ全局ノ大成ヲ期セヨ

戰死 大尉那谷清太郎 梶田則三 牧田六三郎 中尉山千代藤太郎 柏村銀彦 少尉古川泰夫

特務曹長柏女熊吉 渡邊高次 下士卒二百二十名

負傷 少佐勝野直太郎 大尉尾田源太郎 二等軍醫馬島喜久彌 中尉藤田謙二 東萬太郎 吉成

欸 少尉乾隆吉 貫一也 多川隆之允 中島市太郎 三宅攝生 東榮太郎 平手好武 菅

多太一 中村辨三 島嘉三郎 特務曹長齋藤秀治 風神米吉 下士卒四百九十九名

沙河の會戰に敵來たるに敵は攻勢に轉じて逆襲して來た。『何歩哨は敵に攫はれた』『某部隊の前面には五六師團の敵が現れた』吹く風は颯々として肌寒く、滿洲の野は既に秋の深きを思はせる、寂寥を破つて此の敵襲の話は、夫から夫へ傳つた。

露軍は又も遼陽の一戦に敗るゝや、國論驟然としてクロボトキン非難の聲を高め、今度には豫定の退

却ては承知しなかつた。即ち極東第二軍を増派して戦局の挽回に努めんとし、十月七日遂に我軍の最右翼、本溪湖方面の兵力薄きを知り此の方面に向て猛烈なる壓迫を加へて来たのである。

此間に師團の指揮を執れる西島少將は、昇進の上第二師團長に榮轉し、中將塚本嘉勝第四師團長に補せられた。

九月十七日聯隊は師團の先遣隊として太子河を渡り、前八家子より善庄子の線に進出し、近く敵と對峙して居たが、敵軍が愈々大舉して攻勢を取り、其の主力を東方の山地方面なる本溪湖附近に注ぐ頃、我滿洲軍は主力を以て遼陽北方の平地方面より、大逆襲を執行するこゝまなり、十月十日聯隊は師團の前衛となり、少數の敵を撃退しつゝ前進し、楊家甸子を占領した。此夜第六中隊の一小隊は善椎子の敵を夜襲して之を占領し、尙、翌朝迄に優勢なる敵の怪復攻撃を受くるこゝま三回に及びたるも奮闘力戦皆之を撃退したので、軍司令官より感状を授けられた。

十一日午後師團長は楊家甸子に到着し、砲兵を善椎子に放列せしめて、敵を砲撃したので、戦況漸く活氣を呈し來り、小油壘堡及び、三家子の敵を驅逐して之を占領した。然るに敵兵は漸次増加し、逆襲に出づる模様が見へたので、我は應戦しつゝ敵兵を築き、堅固に此の地點を保持した。

翌十二日滿地霜白く東天未だ旭光を洩さざるに、砲聲一發又一發、續いて起る銃砲聲に依つて此

方面に敵の移動せるを知る。仍て聯隊は第一第二大隊を第一線とし、北烟臺に向ひ、第三大隊を三家子より前進して敵の右翼に向はしめたるに、大臺附近の敵は頑強に抵抗せるも之を撃退して進み、聯隊の主力は午後二時四十分烟臺の南方七百メートルに通り、第三大隊の一部も亦敵の右翼を攻撃した。第三大隊長大森少佐傷きたるも荒井大尉代つて指揮し、四時三十分飛び交ふ銃砲弾を濳り、鋼尖を揃へて敵陣の中央に突入し、第一大隊之に續き、遂に北烟臺を陥れて、東北二面に堅固なる防備を施して敵の回復攻撃に備へた。

此日第三大隊(中隊欠)は、小臺に在つて左側警戒中、午後四時四十分大臺の敵兵退却して、萬家園子前方に防禦工事を施しつゝあるを發見し、第十一中隊の一小隊は直ちに大臺を占領したるも、敵歩兵約二中隊の前進し來るに會し、又西部小臺前面にも約二個大隊出現したるを見て、吾小隊は退却して本隊に合し、大臺西北より廣正面に散開前進し來るを間近に引寄せ、一舉に殲滅せんを潛伏中、五時三十分又も約一大隊、側面縱隊を爲りて、黒林臺東方より前進し來るを認め、第九中隊先づ火蓋を切つて、戦を挑むや、敵も忽ち散開して應戦し、刻々に兵力を増加して、其第一線に約一個聯隊を靠し、後方黒林臺東方にも、略同数の敵兵ありて、勢を頼んで怒濤の如く、五百米三百米ミ、漸次接近し來り、爲に聯隊は非常なる苦戦に陥つたが、極力奮戦し且つ砲兵の猛撃に相侍つて、之を三

家子方向に撃退し去つた。仍て第三大隊は射向を、大森西北の敵砲兵隊に向けて之を沈黙せしめ、六時三十分射撃を中止して隊伍を整頓した。

斯くて、兩方面とも、同夜は現陣地を守つて夜を徹した。

明くれば十三日夜來の雷雨尙ほ歇まず、午前六時北烟臺を出發し泥濘を冒して前進し、北堡凌堡の戰團中敵の砲撃は寸時の絶間なく、人馬の死骸は雨に濡れて路傍に横はるさいふ、悲惨の状況を呈したるも終日戰闘を繼續し、聯隊は午後七時猛火を冒して張良堡に突入した。然るに露軍は此方面の兵力を増加せるが如く、全線銃砲聲の轟かざるはなく、雷雨之に加はりて壯絶悲絶、實に筆舌の能く盡くす所ではない。十四日天明と共に、敵は大舉して攻勢に轉じ來り、聯隊前面の敵の兵力は我に約二倍す、各中隊は敵を九百米まで引き寄せて急射撃を加へた、爲に敵の損害は決して尠くなかつたが更に加ふる色なく前進するので、我も亦撃ちに撃ち、第七第八中隊の如きは、彈藥の缺乏を來し、而も敵の銃砲火に妨げられて、小行李の措致など思ひもよらず、塵埃たりし第六中隊より彈藥の補充を受けて、戰闘を續行した。然るに午後一時雷雨沛然として至り、全く通視を妨ぐるや、此機を利用して彈藥補充を行ふたが、敵も亦此機を利用して戰線を推進して、僅に七百米に近接して來た、我砲兵は千五百米の射距離より有力なる援助を與へ、聯隊亦懸命の奮戦を行つたので、三時二十分頃よ



敵は動搖を始め、次で退却、砲二門、彈藥車數輛を戰場に遺棄して敗走した。此日頃より露軍は全線退却を開始した、然し、聯隊前面の敵は總軍の退却を掩護する目的を以て、頗る執拗なる抵抗を續けたが遂に北方に退却した。

五〇

斯くして攻勢を取り、我滿洲軍を粉碎せんしたる敵の企圖も空しく盡餅に了り、大砲四十五門、小銃六千、其他軍需品の山成す大量を我手に致し、將校以下六百四名の俘虜を、四萬一千の死傷を蒙つて、此の大敗戦の幕を下したるは、敵ながら氣の毒のこころであつた。沙河會戰中聯隊の死傷左の如し。

- 戦死 大尉水郡富三郎 中尉松浦貞造 少尉佐藤岩之助 吉安暢 下士卒九十三名
- 負傷 少佐大森羽之助 大尉鎌田彌彦 矢田七郎 尾田源太郎 一等軍醫三宅衛生 中尉林榮助
- 同田中館雄 少尉淺野勇次郎 平手好武 森七郎 三等軍醫岡本一太 特務曹長河田國治
- 下士卒四十一名

消耗彈藥 四十三萬七千六百發

十月十六日滿洲軍に降れる勅語

我滿洲軍ハ敵軍新銳ノ増援兵ヲ得テ大果攻撃シ來ルニ對シ機先ヲ制シテ逆襲シ激戰數日大ノ損

害ヲ與ヘ達ニ之ヲ沙河以北ニ潰走セシメ全ク其企圖ヲ挫折セリ

朕深ク汝將卒ノ忠勇克ク連日ノ勞苦ニ耐ヘ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

沙河の冬營 此時に際り、我軍は戰鬪力の恢復を待つて、更に追撃に移らんとして居た、然し敵の兵力は益々増加し、何時又攻勢を取つて來るかわからないので、之が對策を取るに至つた。聯隊は小武鎮營及小張良營等に、日夜防禦工事を行ひ、朔風肌を劈き、敵砲の塵々飛來する下に在て、氷結深さ一米に及べる土を掘つて塹壕を増設し、要所には機關砲を配備し、掩蓋をも造り、半永久に近き防備を完成するに至つた。敵との距離は六七百米より遠きも、千二三百米であつたから、敵は斷へず銃砲火を浴せたが、我は自重して彈藥の節約に勉めた。斯る間に冬は漸く過つて十月四日薄氷を見、十一月五日には朔風雪を交へ、池沼悉く氷結し沙河も結氷して車輛を通ずるに至つた、村落の家屋は概ね砲撃のため破壊されたので防禦線の直後に幅二米半、長さ約十米深二米の窰室を造り、厚二尺餘の土を盛りて掩蓋をなし、窓を設け、高粱稈を敷いて、其下に暖氣の通ふ如くし、一窰に約二十名宛住むことにした。是れは一つには防備を至嚴にした爲なるは申す迄もない。而して冬營の準備は、些の支障もなく出來上り、住み慣るゝに従つて支那人の不潔な家屋に、優ること數等の感がした。此の地嚴冬の氣温は、攝氏零下三十度位、寒風肌を刺し骨に徹するを覺へ、歩哨の交代

も十五分毎にする必要があつた、殊に霏雪紛々朔風之に作ふ時は、呼吸は凝り、毛糸の覆面には雪が凍り付いて、數分間炎火に温めなければ續れない、眼膜も亦附着せんばかり、遊底も堅く凍つて閉隙の自由を失ひ、之に手指を觸るれば凍著して離れない程であつた。

五二

海軍中の勤務は相當困難であつたが、對陣久しきに伴ふて給養は漸次に潤澤となり、毛布製外食毛メリヤスの襪衣、靴下、手套、絨靴等防寒被服は遺憾なく渡され、又食料品も飽き易き罐詰類は種類を多くし、生肉蔬菜類も相當に多く給與された、又第二線部隊では高粱團子や温飽などを作つて、第一線部隊に送つて其勞を慰むるなど一死同穴を誓ふ、陣中生活の和氣霽々たることは、到底他の人の想像も及ばぬ所である。又時々國民の赤誠に成る慰問袋も分配せられて、陣中の無聊は十分に慰められたのである。

而して一方には此對陣間に内地より送られた、補充兵が多數到着したが、短日數の教育を施された者で、訓練の不十分なのは勿論である、故に戦地に於ても第一線の直後で盛んに教練等を行つた、而も射撃は時々實敵に對し、歩哨圧候も實地の教育が出来るから、其進歩は實に著しく半年教育に依つて十分の技術を有するに至つた。

此對陣中三十七年の天長節、三十八年の新年及び、紀元節と、三大節を悉く迎へたが、殊に一月

元且は小春日和の空に一點の雲無く、日章旗は翻々として各要塞の入口に懸り、士民は慶を軍門に致すなど、滿洲の野に皇化の冷きを思はしめた、其所へ夜半十一時頃、旅順陥落の快報が到着したのだから堪らない、忽ち萬歳の叫びは一齊に全陣地線に響き直り、實に天地を震撼する有様であった、然し此歡呼の聲に驚いたのは露助だ、風聲狗吠にも怯ぢるまぶさ詞の通り、我軍の夜襲と思ひ違ひ、敵陣の各方面に一齊射撃が急に起つたのも突止であつた、吾人の耳には新年の祝と旅順陥落の祝の爆竹をやつてもらつた様な感じがして、實に痛快極りなかつた。

冬營五ヶ月間ノ死傷左ノ如シ

少尉八木忠五郎負傷 下士以下死傷九十一名

奉天會戰 沙河會戰後、沙河を挟んで彼我對陣すること五ヶ月、互に滿を持して放たず、東は撫順附近より西は長嶺に亘り、戰線五十餘里、兩軍共に兵力を増加し、彼我兩軍合して八十萬、砲二千五百門を越え河氷漸く融げんとして、戰機徐に熟す。

一月二十五日より露軍十萬、黑溝臺、沈日堡に殺到し、爲に我左翼は一時危急に瀕したりしも、臨時立見軍が決死の奮闘に依りて、敵に一萬二千の大損害を與へて之を撃退した、所謂黑溝臺の戰是にして奉天攻撃は、此後約一ヶ月にして開始された。